（郵信省許可）　（本號十頁）　明治二十四年八月四日　（定價金二錢）

時事新報

時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり　時事新報には毎號詳細なる商況物價

第三千九十八號
明治廿四年八月四日
舊曆辛卯六月三十日　火曜日
（壬・戌）
日出午前四時五十二分　日入午後六時四十二分
月出午前三時五十六分　月入午後六時四十五分
滿潮午前十時　干潮午後五時二十八分
（西曆一千八百九十一年）

時事新報定價

時事新報は毎號八面乃至十二面にして詳細の商況物價報告あり其代價遞送料廣告料は左の如し
一枚二錢〇一箇月前金五十錢〇三箇月前金一圓五十錢〇六箇月前金三圓〇一箇年前金六圓〇月曜日休刊
〇時事新報社ヨリ直接ニ郵送スルモノハ右定價ノ外ニ一箇月十三錢ノ郵送料ヲ申受ク

時事新報廣告料（前金）

一行五號活字廿四字詰	一日限	一日以上六日迄	七日以上
一行ニ付	十三錢	十一錢	十錢五厘

本社へ寄稿に付

東京府下を始め各府縣に通信社あるものありて是より各新聞社に報道を發送し各新聞社は之を受けて紙面を飾塞するより各社同一の記事を掲ぐるあり寡からず獨り時事新報社は社員並に通信員の多きを以て斯類の社に通信を依頼せずと雖も世間往々此事を知らずして通信社にさへ報道すれば本社にも其報道は達する事と信ずる方多きが如し爲めに行違ひを生じたる場合も寡からざれば本社に記事論說を寄稿せんとする方は直接に本社に向け發送あらんことを請ふ

時事新報

我國海軍の急務

近來世上に海軍の論、盛にして其說く所を聞けば何れも軍艦製造の急務あるを喋々せざるはなし海軍の擴張に軍艦製造の必要あるは勿論なれども我輩の所見を以てすれば方今我海軍實際の要務は何は兎もあれ先づ士官の學力と實驗力とを發達せしめ且つ之と同時に水夫の教育と熟練とを進歩せしむるに在る可しと信ずるなり如何とおれば目下英佛等の海軍國に於て所謂一等甲鐵艦と稱する一萬噸以上の巨大なる軍艦も之を製造するには三年間にして足る可しと雖も然れども之を指揮運轉するに其人あなければ更に其效ある可らず即ち士官の養成を今日に要する所以にして我輩は專ら專實に據りて其必要の理由を說き聊か世人の參考に供せんとするものなり

方今歐洲の諸國中にて海軍の最も進歩したるものは英佛の二國を以て首と爲さゝるを得ず而して兩國の海軍に於て其士官を養成するの實際を見るに士官たる可きものは大抵十三四歲乃至十六七歲より海軍兵學校に入りて士官職業の初步を修め校に在りて修學するみと若干年、校を出でゝ遠洋航海に從事すること若干年、艦隊乘組見習役たるみと又若干年にして其間半ば學科を修め半は實地見習を爲し斯くて廿四五歲にして始めて尉官に任せらるゝものあり而して此尉官たるものは海上の實務は申す迄もなく砲術、水雷術、航海術等の諸專門科を修むるみと若干年、三十七八歲乃至四十歲にして佐官に昇進し佐官の職に在るみと若干年、凡そ五十四五歲にして將官に進むを例とす而して佐官たり將官たる其年限の間と雖も實地に學藝に要職に常に其務に缺掌して疎略怠るみとなく苟も慢安に經過するものに非ずと云ふ

右の割合に據れば英佛の海軍士官は少年より學校に入りて其職業を專修し校を出でゝ始めて尉官に任せられたるときは既に海軍に在るみと凡そ十年間、佐官に昇りたるときは廿五年間餘、而して將官に進みたるときは殆んど四十年間の學習實驗を經たるものなり然るも尙は職に勉めて倦まざること云ふ彼の國々の將校輩が學術に達し實驗に富み海國の海軍士官たるの任務を全ふするも謂れあるに非ざるなり

顧みて我國海軍の發達を見るに其年齡甚だ若くして未だ幼稚の域を脫せざるは世人の皆知る所なれども玆に聊か其概略を述べんに明治の初年政府は始めて海軍省を置き從來舊幕府を始め各藩に所有したる軍艦運送艦を召集して始めて帝國海軍を組織したれども所謂烏合の衆に過ぎずして各艦々内の規則と云ひ紀律と云ひ又士官水夫熟練の程度と云ひ何れも一樣あらず當時或艦の如きは艦長士官と稱する人はあれども艦の運轉は全く古流の水先なるものを雇使して之に一切の事を任じたりと云へり其不完全不始末あるは以て想見る可し然れども其後年を經るに隨て次第に整頓を告げ漸く一定の海軍らしきものとなりたるは蓋し明治十年の頃なりしと云ふ

左れば我海軍の年齡は明治の初年より起算するも二十四年に過ぎずして之を明治十年より計ふれば僅々十四年間の成長あれば彼の英佛の海軍の如く幾百千年來の發達に由りて今日の整頓を致し殊に其士官養成の法の如きも前記の通り幾十年間の學習經驗を積みたるものに比して我海軍士官の學力實驗力に乏しきも固より怪しむに足る可らず然るに今ふの實際の事情を究めずして世の論者の如く漫に莫大の金を投じて一時に巨艦鑑艦を製造するは俗に所謂小兒に甲冑の諺に等しく先進國ある具眼者の笑を免れざる可し

是れに由りて之を觀れば今日至要の急務は今より更に海軍の學術技藝を修むるみと奬勵し又遠洋の航海を盛にし今の士官にして學力あるものは之に實地の研究を積ませ既に實地の經驗あるものには之に學藝の研究を促し學力實地兼備の士官を養成するの方針を一定し之と同時に水夫の教育熟練の奬勵をも怠らずして固く其方針を取り鋭意實行を勉むるみを緊要なれ斯くて今より廿五年乃至三十年の後即ち明治四十九年より五十四年の頃ともおれば我海軍士官の學力實地力も十分に進歩して上下共に彼の歐洲海軍國の同等士官と相匹敵するに至る可し、扨ふの場合みを即ち我腹利ある士官の指揮運轉に供する軍艦を要す可き時にして其軍艦とても亦一時に製造し得べきものに非ざれば此廿五年乃至三十年間に於て我國理財上の緩急を謀り漸を以て製造す可き軍艦の大小、種類、員數及び之に要する金額を定め是れ又一定の方針に隨て着手す可きみと勿論なれども其所謂造艦方針は退て之を評論するみとゝ爲し本篇は唯世間の漠然たる海軍論者が實際の事實を問はずして只管軍艦の製造を急にし以て海軍擴張の要旨を得たるものと爲すの誤を正し今日我海軍の緊急要務は第一士官養成に在る可しとの主義を先進海軍國の例に照らして聊か闡明するに過ぎざるのみ

雜報

○佛蘭西人　第三　婦人

今更驚くべき事にはあらねど佛國人の氣質は千八百七十年の擾亂（普佛戰爭）以來大に變じて何事にも感じ易く今は世界第一に銳敏なる人民となれり例へば政治社會に於ても亦文學技術の社會に於ても平等を望むの情慾甚しく後進者を刺衝して屢々極端の嫉妬心を起さしむるみとあるに至れり尤も是等の欠點は普佛戰爭前にも多少其形跡ありたれども其後の如く甚しきみとは決してなかりしなり然るに幸にして前後共に毫も變ずるみとなきものは婦人の氣質なり但し玆に婦人と稱するは一般の平民社會に於ける婦人を云ふものにして上等社會は孰れの國も大概は皆同樣なるみと恰も旅館の其趣を同ふするが如く聊かの相違あればとて後者に遜の多少あると雖あるとなく外面風習の一部に厚薄あるに過ぎず各國を通じて皆然らざるはなし佛國とても此趣を外るゝみとあければ假令へ倶樂部の喫煙室や化粧室を覗ふて其内幕を探るとも目に着き耳に入るものは小新聞に載するが如き雜報種の一二ページを讀ひる丈けもあるべきのみ國粹の存する所は上等社會にあらず中等以下の社會なれば何人を問はず何國を問はず評者として觀察すべきものは中等社會なり勞働社會なり一國人民の風俗人情を察せんと欲するものは汽車に乘るにも汽船に乘るにも下等の切符を買ふて其室に入るべし上等室に在りては更に得る所あかるべきあり

とは云へ玆に聊か他に異なる所あるを記さんに神も佛國上等社會の婦人が世界流行の源たるみとは皆人の既に知る所なり偖又佛國にては如何に勝れたる男子も婦人に及ばざるものあるは何故なるかレカミエ夫人の言に我れ若し女王あればデスタエル夫人をして終日聞飽くまで談話せしむるとを得べきにと云ひし事あり又或る人は友人と共に同夫人を合して三人にて散步せし時餘りに其談話の面白さに暴風吹き荒びて困難を極むるなかに其前の空氣に氣付かざりしと云ふ既に上手と名を得たる婦人が口を開けば聞くものをして興を催さしむるみとの深きを知るべし斯る例は佛國には珍らしからぬ所にして決してスタエル夫人一人のみならず數人あれば隨分淨山なるべし而して其斯くの如くなるは或は血筋を引くものか十七世紀の頃より母子相傳して今日に至れり思ふに佛國婦人の他に異なる所以は概ね此邊に存すと云ふも敢て不可あかるべき者にはあらずや尤も佛國婦人の中にも稀には新注入の腦髓を救り出して政治、道德、社會の進步等を喧しきまでに議論し聞くに堪へざるものあきにあらずと雖も併し是れは極めて稀に見る所にして十中の九分九厘までは溫しく和かに浩々たる天然の心神を寫し出して故らに飾らず求めず交際社會を修飾して之をして武骨衆風景の野蠻會場とおらしめざるは實に婦人の力あり佛國人の會合に興味濃なゝが如きものあるを思へば婦人に向つて謝せざるべからず今試みに夫人令嬢を交ぜざる會場の畢を想像せよ興味ある會に角の立つみとあるべし而して場内の少かるべし然るに聊か注意を惹くみとあれば今迄火の消えし如く轉々彼れより是に移り此に移り其人とあり或は高く或は低く限りあきの興、一座の人靈さしめ知らず〳〵の間にひあらしむ是れ即ち佛國人の次に職人社會に移りて職人と同樣にて婦人の勢力盛に發けたる小兒に對するに云ふに及ばず妻は亭主に云ふに及ばず亭主は之を憂とせず當に役に應ずるは自分一人に受けて益する所多きを知り生じて其始末を如何せんと内に相談し相場も產く酬亭主は試みに買はんとすれども其家を訪ふ時主人不在にして家内に充分に埒明く其家を訪ふ時主人不在にして家内に充分に埒明く の指圖に在り女房は寔に揮の尼將軍なり

○三田尻築港の許可　山口縣熱心せる築港改築の件は既報の通りなりたるより一時下火とも引立ち株金第三回の拂込金八圓の取纏めに着手するよし

○福岡縣下の水害調査　去月二十一日の洪水に就て福岡縣山岸參事官が實地調査せる被害變死人は東松浦郡にて壓死せしもの十一人溺死せしもの三人漂流三人變死人の合計は郡合十七人にて小城郡の水害調査は左の如しと云ふ

溺水戶數	千二百五十七戶
同人口	五千九百九十三人
浸水田反別	千四百四十五町餘
同畑反別	百九十五町餘
山崩	二十箇所
國道縣道損所	十九箇所
堰堤損所	九箇所
堤方及玄蕃堤防損所	百三十七箇所
豆作被害	六百九十二石餘
稻田荷葉反別	二十七町
田畑荒地反別	九町
焚出戶數	八百三十戶
同人口	四千百零六人
潰家	三十五戶

○第一加能丸の清量斯德行　石川縣下金澤港